
道の果て

アルル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
道の果て

【Nコード】
N5746L

【作者名】
アルル

【あらすじ】
自身の人生を書きました。前半はブルーですが、後半は良くした積りですので、どうか一読下さい。

(前書き)

変な物ですが、どうかお付き合い下さいれば幸いです。

ふと、空を見上げてみると、とても綺麗な空だった。形容し難い美しさ。雲だけが、其れを表現していた。心が癒される様で、又、憂いに満ちる様な、そんな空だった。

見惚れていた気持ち湧いたが、未練を残し、その空に背を向け、僕は歩き出した。

振り返った空には雲は無く、唯、闇に滲んでいた。左には汽車のガードが、右には住宅街が続いている。張巡らされた電線は、住宅街を一定の距離で聳える電信柱に因って中空を走っている。其の中にはワイヤードが在る。其処では進行形で遣り取りが為される。

不意に或る事に気が付いた。電信柱の一本、遙か頭上に有る蛍光灯が明滅していた。ファイアーロードの様に続く明かりの中で、一人淋しく命の尽きるのを待っている。

「嗚呼、あれは僕だ」

誰も聞く者が居ない中、僕は呟いた。行列に混じってみても、所詮色違い。其れでは、命が続く筈も無い。生かされるだけなのである。

「社会にもワイヤードにも、そして、世界にも居場所が無い」

聞く者が在ったなら、何と言うだろう。きっと嘲り笑うに違いない。滑稽とは僕の為に有る言葉なのだろう。自身でも笑えて来る。

気が付いているのに、生きている。生存している。誰が為に？……

僕は、誰だ？ 何度も何度も繰り返した問いだ。一つ歳を取り、二つ歳を取り、その度に自身に問い掛けて来た。答えは、未だに出ない。偶たまに現れる僕の中の僕も、その問いには答えては呉れない。唯、よく解らない事を言うだけだ。耳を貸しては不味いけないと思っても、考えてみても、然し、肯うけがってしまふ。やはり誰の役にも立たないからだろう。生まれて来た事自体、僕にとっては不思議に思えてならない。全体、僕は何故居るのだろう。何処にも居場所が無いという

のに。

自然立ち止まった足に、僕は、早、目的地に着いている事を知った。視界に捉える建物は、僕が目指していた処だ。用が済んだのなら帰らねばならない。

僕は踵を廻らし、歩き出した。然し、何処へ？ 何処にも居場所が無い僕は何処へ行けば良い？ 見上げた空にはまだ、綺麗な雲が浮んでいた。

「嗚呼、そうか」

僕の帰る場所。其れは……。

思わず吹き出してしまった。還る場所は、空だ。いや、あの空の向こう。星の居る処だ。之まで一向気の付かなかった僕の居るべき場所。其処へ行こう。

そして、僕は歩いた。向かうべき処を目指して。何時かと言わず、之から日取りを決めれば良い。一刻も早い方が良い。何時にしようか。遣るべき事はもう済んだろうか。気に掛かる事はもう無い。ならば、きつと全てを終えた筈だ。何時でも好きな時を選び、好きな処で行けば良い。

僕の名はアルル。アルルは死に逝く者。アルルハシニユクモノ。アルルハアツテハナライモノ。アルルハイライモノ。アルルハステルモノ。アルルハ……。

もう決めたよ。多分大丈夫さ。誰も泣かない。だから、大丈夫。皆、どうも有難う。とても楽しかったよ。涙を随分流したけれど、それでも、皆と出会えて良かった。嬉しかった。だから、楽しかったんだ。この闇に呑まれるまでに出会えた兄妹二人には、心からの感謝を。きつと元気でいて欲しい。理由は解らないけれど、僕の事を見て呉れた人達には幸福を。僕の見た綺麗な雲は、空は、皆にあげるよ。大事にしてくれとは言わない。一度手にとって見てくれさえすれば良い。僕にはもう必要無い。光が無いんだから。何も見えないなら、何も要らない。唯、枕だけは欲しいな。寝心地が悪いの

は嫌だから。耳は聞こえてるから、シルクみたいな水面の音を聞いていたい。鼻も利くから、その音に乗って流れてくる潮の香を味わいたい。樹のざわめきと、潮の香と、その音。闇の中でもそれだけ有れば僕は幸せだ。失せる間際まで記憶は有るから、その中に有る温もりを感じていけば、それで僕は充分だ。だから、皆は自分の靴が有る事を忘れないで呉れ。辿り着いた場所は、自分の選んだ道を歩いたからだと知って呉れ。そして、その先がまだ有る事を忘れないで呉れ。皆はきつと光を掴む事が出来る筈だ。僕はそう信じているよ。見守る事が出来るかどうかは解らないけれど、それでも僕は皆を信じる。忘れないで欲しい。世界はとても綺麗なんだ。皆は其処に生きているんだ。きつと何処までも歩いて行ける。壁なんて無いさ。そんなのは自分の中の迷いなんだ。立ち向かえば良いさ。きつと、その先は皆を待ってる。その先に在る、その先に居る人が。ハーネスなんて脱ぎ捨てて、好きな様に歩けば、走れば良いのさ。縛る物なんて本当は無いんだ。皆で幸福の唄を唄えば良いんだ。信じられない程に楽しいから。それぞれの想いを持ち寄って、在るがままの気持ちで、大きな声で唄うんだ。そうすれば、皆の願いは叶う筈さ。何てつたって、皆は綺麗なんだから。間違える筈が無いんだ。誰の手だつて温かいだろう。手を取って踊ると良い。心まで躍るに違いない。そして、それが皆の財産になるんだ。忘れられない、尊いものに。目が眩む程の輝きに。皆はそれを飲めば良い。僕の様には毒ばかり飲んだんじゃ剣呑だ。日々はもう戻らないんだから。時は寿命。大切にしないとね。削るばかりじゃ勿体無いよ。春夏秋冬、時の唄を聞くんだ。命の唄を。歩きながら、走りながら。心を躍らせて、皆で踊って。時には立ち止まって泣いてみるのも良いかもね。それはきつと、その先の導に成る筈だから。泪の跡は、また走り出したその勢いで、何時の間にか乾くのさ。哀しみだけ、その大切さだけを残して。解るだろう？ 皆は僕の様には馬鹿じゃない。光を紡いで、心を繋いで、想いを馳せて。そう、自由なんだ。皆は無限の可能性を持っている。そして、きつと無駄にはしない。蓄は必ず花

開く。色取り取りの世界が出来上がるのさ。なんて、楽しそうなんだろう。羨ましいな。でもね、やっかみはしないよ。僕には出来ない事なんだからさ。宿らなかつた輝きを欲しがる程、僕は子供じゃないからね。充分さ。皆の事を知つただけで。世界が虹色に染まるだろう事を想つただけで。だから、本当にありがとう。素敵な気分さ。良い気持ちなのさ。可愛らしい花弁はなびらが、僅かな風に揺れているのは、きつと気のせいだ。そうしておいて呉れないか。恥かしいけど、そうして呉れよ。じゃあ、またね。

終

(後書き)

何かしら感じて頂けましたなら幸いです。有難う御座いました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5746/>

道の果て

2010年10月28日08時30分発行